

## (2017年度あけの星会総会「講話」) 「絆」—神の愛を生きる

マリアの宣教者フランシスコ修道会 亘理修道院 内田 雅

「絆」が、2011年の言葉に選ばれました。東日本大震災で、すべてを失い、絶望の中で私達にできることは、繋がりあうことだと誰もが痛感したからです。私達キリスト者にとっては、「絆」とは、いったいどのような意味があるのでしょうか。「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい……。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させる絆です。」(コサ13・12-17) ここでの「絆」には二つ以上のものをひとつにまとめるというギリシャ語が使われ、愛がすべてを完成させる「絆」であると言われています。

さて、私が修道会へ入会してから終生誓願まで、10年近い時を要しました。それは様々な囚われから解放され、全く自由な心で主に「はい」と応えるためでした。主のなさり方は不思議です。誓願宣立ミサで、主は私の罪深さを一瞬にして見せられると同時に、こんな私が無償で、一方的に主に愛されているという体験をさせて下さいました。これこそ、主が私と結んで下さった絆でした。この愛の体験は、私の修道生活の原点であり、絶えず戻っていく場となりました。2004年、南アフリカに派遣され、8年間エイズで親を亡くした子供たちと生活しました。貧富の差、エイズの蔓延、犯罪率の高さなど、孤児となった南アの子供たちの環境は過酷です。それでも、大家族制(親戚が一つの家族)によって、施設の中の互いの関りによって、善意の人々からの支えによって、子供たちは、様々な人々との関りを通して、神から愛されていることを知っていました。その愛されている確信が子供たちの生きる力の源泉でした。

2015年、私は亘理へ派遣され、被災後にイチゴ栽培を始められたMさんに会いました。津波に巻き込まれながらも、奇跡的に助かり、同時に、目の前で数十人もの人々の壮絶な死を体験された方です。深い傷を持つMさんが、ご家族、周囲の方々の愛によって、そして精魂込めて世話をする美しいいちごという自然との繋がりによって、笑顔を取り戻されています。彼女を支える人々の愛の中に、私は主の働きを見えています。

2016年熊本地震、家族と連絡が取れず不安に思う私に、一番に声をかけて下さったのはMさんでした。いちごを無料提供するので販売し、それを義援金にと、Mさんの申し出がありました。その6日後、私は、あけの星会、仙台各小教区、ダルクの方々を通して集められた義援金を持って、震源地に近くの出身教会に立っていました。義援金と共に託された心を伝えるために、苦しみを、痛みを、自分のものとしてくれる人が東北にいる。それを聞いて、皆涙しておられました。私の中で東北と熊本が一つに結びあわされた瞬間でした。結ぶものは「愛」でした。結ばれた心が一つになって、そこに慰めと静かな平和がありました。Mさんを支援しているつもりで、実は与えられていたのは私の方であったことにも気づかされました。絆は、結ばれた双方の間に愛をもたらすものでした。

私たちキリスト者にとって、絆とは、愛によってひとつに結ばれること、愛することです。それは容易いことではありません。なぜなら、愛するとは、心を開き他者を受け入れることだからです。それは同時に傷つくこと、苦しむことです。自分を無にしていくキリストの道、十字架を共に担う道です。私達は、神の愛に結ばれ、神が私達を無条件に愛して下さっていることを知る時、他者を愛する力と勇気が与えられます。神は、私達をこの愛に生きるよう招いておられます。それは私達が神からいただいた真のいのちを生きるためです。この招きに応えることができるよう、神のみ旨を、まったく完全に果たされた聖母マリアの取次ぎを願って祈ります。

「主の霊の賜物が、主の現存と 私たちへの主の愛のすべてを感じさせて下さいますように。主の霊の賜物が、喜んでいる人と共に喜び、泣いている人と共に泣き、孤独な人や苦しむ人に寄り添い、傷ついた人を慰め、困っている人に手を差し伸べる力を下さいますように。主の霊の賜物が、神との結びつきと交わりの内に私達を成長させ、神とその愛を証する者として下さいますように。」(教皇フランシスコ「聖霊の賜物」からの抜粋)





南アフリカの子供達 聖アンナホーム



義援金のために働いて下さる亙理教会の人々とダルクの仲間達



信徒のみなさんから預かったメッセージ

世界貧しい人の日 2017年11月19日

「言葉だけでなく、行いで愛し合おう」